

曾根原久司 NPO法人「えがおつなげて」代表理事

# 農山漁村には未知の可能性がある

今、若者や団塊世代の間では、地方への移住や農山漁村暮らしを希望する人々が増えている。その背景には一体何があ  
るのだろうか。都市と農山漁村の連携・交流・融合を進めているNPO法人「えがおつなげて」の代表理事で、ご自身も  
山梨県白州町に移り住んだ、曾根原久司さんに聞いた。

## 都市と地方の「調整弁」

都市と地方は今、両極端な状態に  
あります。都市は過密化、地方は過  
疎化が進み、都市の住人は若い人が  
多く、地方は高齢化が深刻。経済の  
規模は都市は大きい、地方は小さ  
い。自然環境は都市では悪化、地方  
は豊か……。

そんな都市と農山漁村のバラ  
ンスを取る「調整弁」のような役割を  
担おうという思いで、2001年、

都市の企業がNPOと協働し、遊休農地を開墾



が汗水流して開墾し、当NPOの農  
園「えがおファーム」を作り上げた  
のです。

ニートやフリーターという人々  
は都市部では有力な働き手と見なさ  
れていません。一方、農村部の遊休  
地はよっかいもの扱いられていま  
す。しかし、その両者を合わせたと  
きに新たな価値が生まれるのです。

二つ目の柱は、都市部の企業との  
連携による新たな産業づくりです。  
例えば食品会社と連携し、えがおフ  
ームでとれた安全・安心な農産物  
を加工して販売したり、企業向けレ  
ンタルファームにも力を入れていま  
す。都会で働く人やその家族が気軽  
に農業体験できるレンタルファーム  
事業はとても好評です。

東京都多摩市にある有名なケー  
キシヨップ「グラン・クリュ」の石

一つ目の柱は、農村地域で管理さ  
れなくなった遊休農地を再生活用す  
ること。まず手はじめに、北杜市の  
約3ヘクタールの遊休農地を、都市  
部に住む大学生やニート、フリータ  
ーたちの手を借りて開墾しました。

3ヘクタールといえば、かなり広大  
な面積です。それを都会の若者たち

NPO法人「えがおつなげて」はス  
タートしました。八ヶ岳の麓に広が  
る山梨県北杜市を拠点に、都市と農  
山漁村の連携・交流・融合を目的に  
した様々な活動を行い、大きな手ご  
たえを感じています。

我々の活動は、五本の柱で成り立  
っています。